

国際バカロレア教育カリキュラムにおける 「キーコンセプト」を活用した思考支援手法の検討 —保護者は我が子の学びをどう捉えるのか？— A Study of Thinking Support Methods Using "Key Concepts" of the International Baccalaureate Curriculum —How do parents perceive their child's learning?—

菅井 篤
Atsushi Sugai

静岡福祉大学
Shizuoka University of Welfare
sugai@suw.ac.jp

概要

本研究では、学習を誰かからの観察によってつくられる変化(有元, 2013)だと捉え、国際バカロレア (IB) 教育を捉えなおし、IB への批判的な検討を試みた。IB を履修する小学生の保護者へ自由記述式の質問紙調査を実施し、日常の実践でのキーコンセプトの活用が、どのように保護者によって観察されているのかを探っていた。これらのことを通して、IB は、日本の教育を改めて評価し改善していくための、ひとつの視点であるという提案がなされた。

キーワード: キーコンセプト (key concepts), 国際バカロレア (International Baccalaureate)

1. はじめに

1.1 日本への国際バカロレア教育の導入

2022 年度までに、日本では国際バカロレア (International Baccalaureate: 以下、IB) 認定校等を 200 校にする計画が進められている (文部科学省, 2021)。IB とは、国際的人材の育成を目指す 3 歳~18 歳を対象とした国際教育プログラムである。高校 2・3 年生を対象とするディプロマプログラム (DP) 修了生には、世界共通の大学入学のためのスコアが与えられ、それを活用し、大学へ入学することができる。

IB 教育プログラムを特徴づけるのは、概念を通した学びを重視するカリキュラムの設計である。日本の学校教育は各学習指導要領に基づき、児童生徒に必要な資質・能力を育成することを理念として、教師がカリキュラムを編む。一方で、IB では学校を「学び合うもののコミュニティ」と捉え、学習すべきゴールを先に設定する。そして、そのためのスキルを獲得し活用する学習内容を、学習者が自ら選択していく逆向き設計のカリキュラムをとる。3 歳~12 歳の児童を対象とした IB 初等教育プログラム (Primary Years

Programme: 以下、PYP) の教育文脈では、教師も児童と同様に学習者として共同し、様々にカリキュラムを編成していく。

1.2 IBPYP におけるキーコンセプト

IBPYP では授業場面における概念の価値が強調されている。具体的には、「Function, Change, Causation, Perspective, Connection, Responsibility, Form」の 7 種の概念 (または、Reflection を加えた 8 種) をキーコンセプト (key concepts) と位置づけ、これらの概念を、思考の視点として活用することが提案されている (International Baccalaureate Organization: 以下、IBO, 2009)。

PYP の実際の授業では、事実から知識を獲得するような、教師が単に知識を提示したり、抽出したりすることで児童へ事実を教授する場面は多くない。PYP では、キーコンセプトの視点から、教材教具などの対象を児童が眺められるように、教師は仕掛けと工夫を施し、思考することができる場づくりをしていくことで、児童を支援する。そして、その支援から、児童は対象に対する思考内容を整理し、思考を構築していく。

概念を通した学びを企図する授業では、教師の示した課題から、児童らは共同し、創造し、問題解決を図り、思考を構築する。そして共創された概念を他の学校文脈、あるいは日常の経験文脈で活用したり、関連づけたりすることで、思考が強化され、一般化されることを図る。とりわけ初等教育では、中等教育や高等教育に比べ、数や色や言葉などを理解するために、概念を基に思考する領域が多くを占めている (エリクソンら, 2020)。

そこで本研究では、キーコンセプトがどのように日

常の実践に活かされているのかということを探るため、保護者からみる PYP 生の姿に焦点を当てる。

1.3 研究の目的

本研究では、日常を共に過ごしている保護者の観察から、どのようにキーコンセプトが日常の実践で活用されているのかを探ることを目的とする。ここでは、学習を誰かからの観察によってつくられる変化(有元, 2013)だと捉え、IBPYP を捉えなおし、批判的な検討を試みる。それにより、今後増加が見込まれる PYP 認定校における IB 教育実践に還元可能な思考の支援方法について萌芽的な示唆を得ることができるだろう。

2. 方法

2.1.1 調査対象者

対象は学校教育法第 1 条に規定される学校(以下、1 条校)の PYP 認定小学校に通う児童の保護者であった。

2.1.2 実施時期

2022 年 6 月。

2.1.3 調査実施の依頼手続き

調査の実施にあたっては、日本国内の全ての 1 条校の PYP 認定小学校 8 校(公立 1 校、私立 7 校)に実施を依頼した。依頼では、調査データが学術研究以外の目的で使用されることはなく、対象者の私的情報は保護される点が説明された。

調査の実施への協力の回答が得られたのは私立小学校 1 校であった。本調査の概要を説明した用紙を、協力校に所属する児童を通して保護者宛に配付した。なお、本調査は静岡福祉大学研究計画倫理審査で審査・承認を得た上で実施した(承認番号 SUW21-7)。

2.1.4 調査概要

キーコンセプトに関する自由記述式の質問紙調査をオンラインで実施した。調査では、対象者の子である PYP 生について、自由記述式の回答を求めた。その結果、PYP 生 17 名の保護者から回答があった。回答があった保護者の子は、1 年生 8 名、2 年生 2 名、3 年生 1 名、4 年生 4 名、5 年生 2 名であった。回答者である対象者は父親 4 名、母親 13 名であった。

2.2 分析手続き

質問紙調査のキーコンセプトに関する質問は、「重要概念(キーコンセプト)を用いた概念的思考は、対象のお子さまのどのような資質・能力を育むと思いますか。」であった。

回答から得られた自由記述を調査データとして、KH Coder(樋口, 2020)を用いて多く使われている語を抽出した。次に、その抽出結果を参考に、筆者が興味深いと考えた特徴的な記述から、保護者が PYP 生の学びと捉えているものについて考察を行った。

3. 結果と考察

3.1 上位語の抽出

総抽出語数は 731 語となった。抽出に当たっては、用語自動抽出システムの Term Extract を用いて複合語(例: キー+コンセプト=キーコンセプト)を抽出した。抽出された主な上位語を、表 1 に示した。

表 1 上位語の抽出結果と記述者人数

抽出語	出現数	記述者人数
考える	10	7
力	9	7
解決	6	6
思う	6	4
キーコンセプト	5	2
育む	5	5
学ぶ	5	3
思考	5	5
様々	5	5

3.2 特徴的な記述

上位語を多く用いた興味深い特徴的な記述を表 2 と表 3 に示した。なお、それぞれの下線は筆者が加筆した。

表 2 具体的な記述(小学 4 年生の保護者)

キーコンセプトについては、授業や学校生活の様々な場面で繰り返し触れてきたことで、探究的に考える方法を知り、ひとつの物事を多面的に捉える力が圧倒的に伸びたと感じます。

①キーコンセプトを使って考える方法が大変身近なものとなり、分からないという壁にぶつかった時、まずキーコンセプトの中のどれかから考えてみると、とっかかりが見えてきたりするようです。今はまだ、知

っていることを口に出して試している段階のようにも思うのですが、もう少し経験を重ねると、②自分の技術として習得できるように感じますので、応援しています。

③キーコンセプトを使って考える力は、学校生活の課題だけではなく、自分の興味関心についての疑問はもちろん、日常の解決が必要な場面であっても存分に活用できることに思います。

最近、驚きとともに嬉しく感じたことがあります。学校の先生にも共有させていただいたことがあります。現在年長の次女がチューリップの絵本を読んでいたところ、PYP4年の長女が「球根はどう change しているかな?」「おうちの庭のチューリップとどこが同じでどこが違うかな?」と手紙に書いて次女に考えさせていたことを知り、大変驚きました。チューリップの絵本そのものも良本なのですが、長女の手紙があったことで、単なる図解的な見方や読み聞かせにとどまることなく、球根が変化していくことを知り、④庭のチューリップと色や花の形が違うことに気付くことができたようで、次女にとっても学びの時間となりました。

「①キーコンセプトを使って考える方法」と「②自分の技術として習得できる」と「③キーコンセプトを使って考える力」とあるように、キーコンセプトの活用は、習得や思考のためのツールであると捉えられていることがわかる。また、「④庭のチューリップと色や花の形が違うことに気付くことができた」のように、キーコンセプトは学校文脈を越えて、日常の実践でもツールとして活用され得る場面が保護者によって観察されていることが明らかになった。

表3 具体的な記述（小学5年生の保護者）

抽象的な物を捉える事が少し苦手（だと親は感じているが）なので⑤キーコンセプトを用いて学習していく事で、考えている事や取り組んでいることの軸がブレることなく進める。なので、⑥本人は様々な角度から学ぶことに苦手意識を持つことなく、自分の意見や意思を表現できている。

「⑤キーコンセプトを用いて学習していく」から、①、②、③の記述と同様に、キーコンセプトが学習のためのツールと捉えられていることがわかる。「⑥本人は様々な角度から学ぶことに苦手意識を持つことなく、自分の意見や意思を表現できている」から、児童にと

って理解が難しいと思われる抽象的なことでも、キーコンセプトを活用し、理解を試みる場面が、保護者によって観察されていることが示された。

3.3 考察

キーコンセプトが日常でどのように活用されているのかを探るために、本研究では保護者による観察からの検討を試みた。この保護者の観察から示唆された、児童によるキーコンセプトの活用方法を、次の3つに大きく整理する。

- 1 児童は、キーコンセプトをツールとして、日常の実践でも活用しようとしている。
- 2 キーコンセプトは、児童にとって、習得、思考、理解の原因となる。
- 3 キーコンセプトは、抽象的なことへの理解のためのツールとして児童に活用される。

これらのことから、それぞれのキーコンセプトはPYP生のひとつのツールとして活用されて、学びを巻き起こす原因となる可能性が示された。この結果から、IBが提案する「学びのための力強いツール（IBO, 2009）」として、実際にキーコンセプトが、PYP生に活用されていると強調することができるだろう。

3.4 展望と今後の課題

本研究は、保護者からみるPYP生の児童の日常の実態を探ることで、PYP生がどのようにキーコンセプトを日常の実践で活用しようと試み、学びを深めているのかということについて考察し、批判的な検討をすることを目的とした。本研究で明らかになったことは、キーコンセプトをツールとして、児童が活用しようとしている姿が保護者によって観察されていたことである。これは、一見すれば、概念を通した学びを重視するPYPのカリキュラムが日本の学校教育において十分に機能し、児童の日常に積極的に活用され、児童の学びを深めていると捉えることができるかもしれない。このように、IBが、日本の教育にとって、新しい思考支援方法であるならば、その導入によって日本の伝統的な教育方法はどのような影響を受けたのか、改めて再検討する必要があるだろう。

例えば、PYP認定校ではない一般の小学校の国語の授業で行われる記録文の単元では、アサガオやひまわりなどの植物を記録するときに「くわしくする言葉」

として、「数、大きさ、色、形、長さ、触った感じ、以前と違うところ、上（横）から見ると」などの語を頻繁に用いて、教師は児童に指導をしている。この「くわしくする言葉」は、キーコンセプトと同様に学びのツールとして扱われているだろう。しかし、両者は同一の性質を持つようなツールではない。数や大きさは記録文の単元における思考や行為の結果であるのに対し、キーコンセプトの活用は思考や行為のための原因となるもので、対極の立場にあると言える。

「くわしくする言葉」の指導の視点は、児童らの日常の文脈に十分に活かされるであろうが、IBのキーコンセプトという語のようなラベリングがなされていないため、日常を共にする保護者からは、記録文の単元の学びが活用されているとは観察されにくいであろう。日本の伝統的な教育実践のそれぞれの単元の視点が、どのように活用され、応用されているかを全て観察することは難しいことだが、誰かによって観察されなくても、児童らには活用され、応用されていることは事実である。

そのように考えると、IBの導入前から、日本の学習指導要領をベースとした伝統的な教育方法は、様々な形で浸透し地域化され、教育効果を上げている。しかし、そのことは当然の事実のごとく、意図的に誰かによって観察されていない。教育政策としてIBが日本の教育に導入されている事実が物語ることは、国際的なものとして、あるいは新規的で効果があるものとしてIBは日本の学校教育に良い影響を与えるものであるとの前提があるということである。そうでなければ、教育政策としてIBは推進されていない。このIBが良いものであるとの前提から、児童の様子を観察すれば、さまざまな変化が見えてくるが、その変化は、観察によってつくられた変化ということである。

学習が誰かによる観察によってつくられる変化（有元, 2013）であるならば、学習指導要領とIBのカリキュラムそれぞれの視点から児童の何を観察し、あるいは観察しないのかによって、つくられる児童の学びの形も変わっていくという見方もできる。言い換えれば、キーコンセプトという視点を活用したIB教育を、日本にとって全く新しい思考支援手法として評価することもできるし、日本の伝統的な教育の機能を補い強化していくものとして受け入れていくこともできるということである。もし前者であるならば、IBの教育効果としての児童の学びは、IBのカリキュラムやキーコンセプトというツールによって、誰かによってつくられた

学びということになるし、さらに言えば、観察によってつくったつもりになっているということもできるだろう。

本研究では、その結論に至るまでの議論が不十分であるが、これまで日本の教育が大きな課題を抱え、機能不足に陥ったこともなく、時代の潮流に合わせ課題を見つけ、改善に取り組んできたことを考えると、IBは日本の教育にとって革新的なものではないという見方もできるだろう。IBは、日本の教育で当たり前に行われてきた支援手法に、多様な面からスポットライトを当てていることは間違いないだろう。しかしその演出方法は、多様な学びを新たに想像するものなのか、あるいは、これまで光を照らされず、積極的に観察されてこなかったが、もともとそこにあった学びの側面なのかを、適切にみていく必要があるだろう。このようにして、IBは、日本の教育を改めて評価し改善していくための、ひとつの視点であると捉えてもよいかもしれない。

本研究では保護者への自由記述式の質問紙調査を行った。調査実施校は1校のみであった。加えて保護者、及び児童本人へのインタビューや、授業観察には本研究では至っていない。多様な視点から調査を継続し、学校教育における支援方法の検討を重ねていく事が今後の課題である。

文献

- [1] 有元典文, (2013) “学習という観察”, 認知科学, Vol. 20, No. 3, pp. 281-282.
- [2] H・リン・エリクソン, ロイス・A・ランニング, レイチェル・フレンチ, (2020) “思考する教室をつくる概念型カリキュラムの理論と実践: 不確実な時代を生き抜く力, 遠藤みゆき, ベアード真理子訳”, 北大路書房.
- [3] 樋口耕一, (2020) “社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第2版”, ナカニシヤ出版.
- [4] International Baccalaureate Organization, (2009) “Making the PYP happen: A curriculum framework for international primary education”, International Baccalaureate Organization (UK) Ltd.
- [5] 文部科学省, (2021) “国際バカロレア・ディプロマ・プログラムと学習指導要領との対応関係について”, https://www.mext.go.jp/content/20210428-mxt_kyoiku01-00014639_15.pdf, 2021年7月15日.